

古代の絵馬小考

久保寿一郎

1. はじめに

粕屋郡粕屋町に位置する戸原麦尾遺跡の第ⅢC区から、馬を描いた板絵が出土した。このような絵馬は今日までに少数ながら各地からの出土例が知られている。また昨年には平城京跡二条大路の溝から彩色を施した絵馬が出土し、最古にして最大の絵馬として紙面を飾ったことは記憶に新しい。小稿ではこれら遺跡から出土した絵馬を概観し、初期（平安時代末～室町時代初期）の絵馬資料と比較しながら考察を行うこととする。

2. 出土絵馬の様相

出土絵馬の類例は戸原麦尾遺跡例を含め、管見にて10遺跡20点を数える(Tab,1)。以下、各資料について表現方法を中心とした特徴を見てゆくことにする(Tab,2)。

私田^(注2)柵跡 (Fig, 1－1)

1/2以上欠損しており、確定はしえないが表裏に描かれている。飾り馬であろうか。

道伝^(注3)遺跡 (Fig, 1－2・3)

寛平八年(896年)銘記のある木簡などとともに水路跡から出土している。①は中央部分が不鮮明であるが、左向きの飾り馬を描いたらしく、手綱と思われる表現もある。②も左向きの飾り馬が描かれており、①より小型ながら共通した表現方法がうかがえる。

伊場^(注4)遺跡 (Fig, 1－4～9)

大溝とそれに注ぐ枝溝より出土した多量の木製品の中から6点の絵馬が確認されている。①は

出 土 地	数量	時 代	出土遺構	備 考
秋田県仙北郡仙北町他 私田柵跡	1	平 安		
山形県東置賜郡川西町 道伝遺跡	2	奈 良 ～ 平 安	水 路 跡	木簡等出土。
静岡県浜松市東伊場町他 伊場遺跡	6	奈良～平安前期	大溝・枝溝	斎串、人形、馬形他木製品、木簡、陶馬、土馬 馬骨等出土。
静岡県藤枝市立花 郡遺跡	1	奈 良	溝SD26	斎串他木製品、木簡、土馬、桃種子類等出土。
滋賀県長浜市十里町 十里町遺跡	1	奈 良 ・ 末 期	土 墳	
奈良県奈良市法華寺町 平城京跡	1	奈 良 ・ 初 期	溝	山水図(板絵)、木簡等出土。
奈良県大和郡山市稗田町他 稗田・若槻遺跡	4	奈良後期～平安前期	河 川	斎串、人形、馬形他木製品、木簡、土馬、 人面墨書土器、馬骨、牛骨等出土。
福岡県太宰府市太宰府 大宰府左郭8条9坊推定地	2	鎌 倉	溝SD605	墨書木札他木製品等出土。
福岡県太宰府市観世音寺 推定金光寺跡	1	鎌 倉 ～ 室 町	包 含 層	什器類他木製品、僧形仏、懸仏他 寺院関係遺物出土
福岡県粕屋郡粕屋町 戸原麦尾遺跡	1	平 安 ・ 後 期	溝SD61	

Tab, 1 絵馬出土遺跡一覧表

曲物側板を利用したもので、角や尾の形状から左向きの牛と思われる。9世紀後半代。②は下半部のみが明らかで、蹄が表現された脚より左向きの馬を描いたと思われる。①と近接して出土し、同じく9世紀後半代とされる。③は上半部が欠損するものの、蹄を有する脚や尾の表現から左向きの馬を描いたと思われる。9世紀後半代。④は角と尾の表現から左向きの牛と思われる。毛並みが誇張して表現されている。8世紀後半～9世紀前半代。⑤は左向きの裸馬で、体部に赤色顔料の痕跡を残す。8世紀後半～9世紀初頭。⑥は曲物側板と思われるものに頭絡、手綱、鞍、障泥などが表現された左向きの飾り馬を描く。8世紀中頃かとされているが、層位的に明確にはしえないようである。これらは③以外いずれも中央上方に円孔を有している。

大溝において祭祀関係遺物が盛行するのは8世紀前半～

9世紀前半であり、絵馬もこの時期に含まれている。また馬形木製品が衰退した後も、絵馬は存続するようである。

(注5)

郡遺跡 (Fig.1-10)

奈良時代の溝から木簡などとともに出土している。上半部は腐蝕しており不明瞭であるが左向きの飾り馬を描いたと思われる。体部には斑毛状の表現があり、手綱も描かれている。木簡の転用材で、裏面には「□六日□牛等飼七月二日丁□」など月日を中心とした記述が見られる。中央上方に円孔を有する。

絵馬が出土した溝のすぐ北側にはそれに先立つ溝が並走しており、両者ともに豊富な祭祀関係遺物が出土している。絵馬などの遺物は溝縁部に沿った中～上層に集中していたという。

(注6)

十里町遺跡 (Fig.2-1)

一部不明瞭であるが頭絡、鞍などをつけた左向きの飾り馬が描かれている。中央上方に円孔を有する。復原長径1.2m、短径0.8m、深さ0.65mの土壌の最上層から、奈良時代末期の須恵器の鉢をかぶせた状態で出土している。

(注7)

平城京跡

二条大路の溝より出土した。鞍や障泥が表現された右向きの飾り馬が描かれている。馬体に赤色、鞍に白色など彩色の痕跡が残る。伴出した大量の木簡の年代から、天平十年(738年)以前に描かれたのは確実とされ、現存する最古の絵馬に位置づけられる。ヒノキ材。

(注8・9)

稗田・若槻遺跡

2回にわたる調査で、平城京造営に伴う人工河川からおびただし量の祭祀関係遺物が出土し、

	長さ(横)	幅(縦)	厚さ
弘田棚跡	14.0	4.0	0.4
道伝遺跡①	15.0	8.0	0.9
②	10.0	8.0	0.6
伊場遺跡①	12.0	9.6	0.5
②	11.8	7.6	0.3
③	14.5	3.3	0.9
④	13.5	5.9	0.7
⑤	8.9	7.3	0.5
⑥	11.4	7.1	0.5
郡遺跡	13.4	7.5	0.4
十里町遺跡	23.7	16.8	1.2
平城京跡	27.0	19.5	0.7
大宰府①	30.2	5.7	0.3
②	15.7	13.5	
推定金光寺跡	4.3	6.6	0.3
戸原麦尾遺跡	14.1	6.0	0.6

Tab. 2 出土絵馬計測表(単位:cm)

※一部実測図より計測

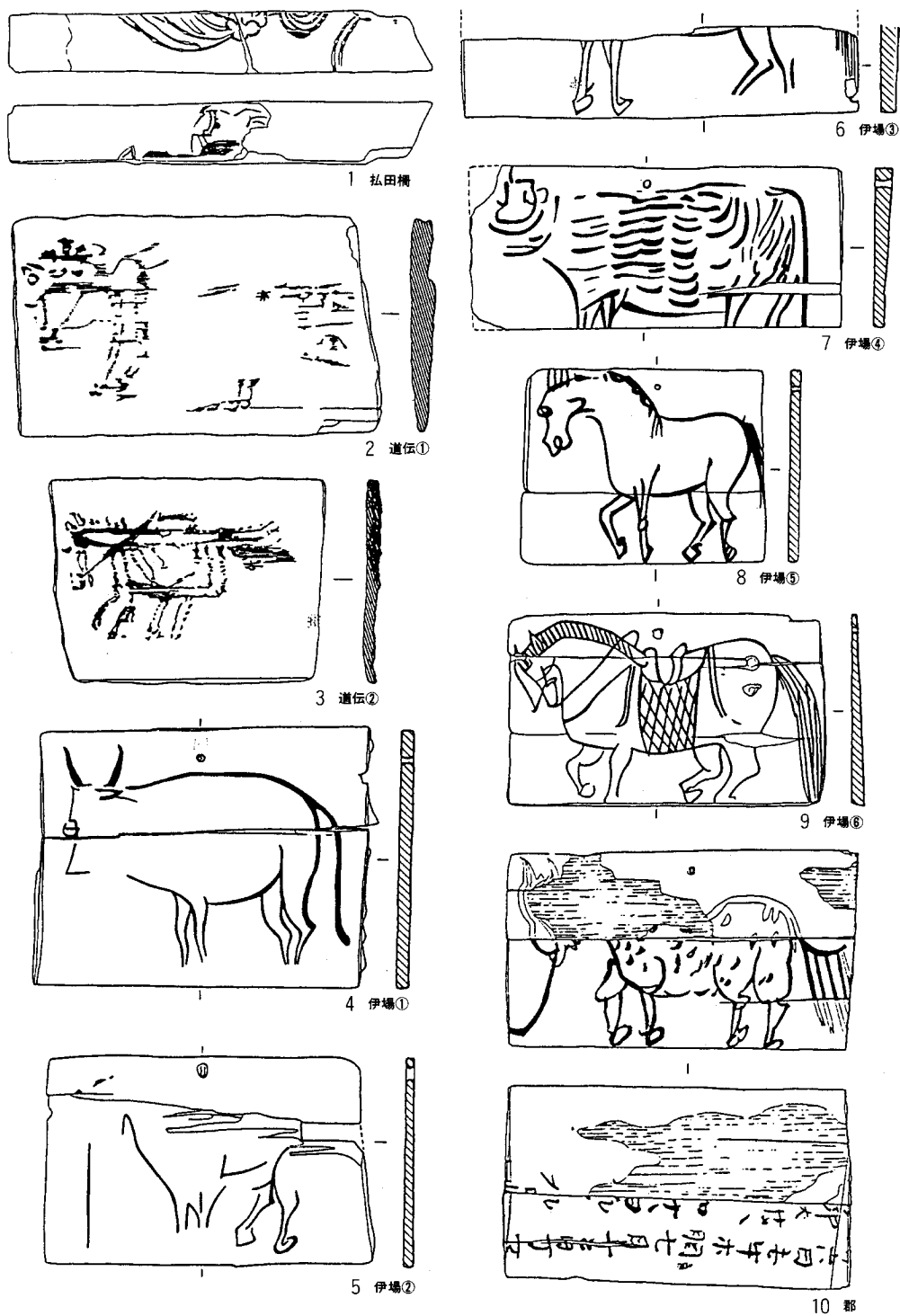


Fig. 1 出土絵馬実測図① (2/5)

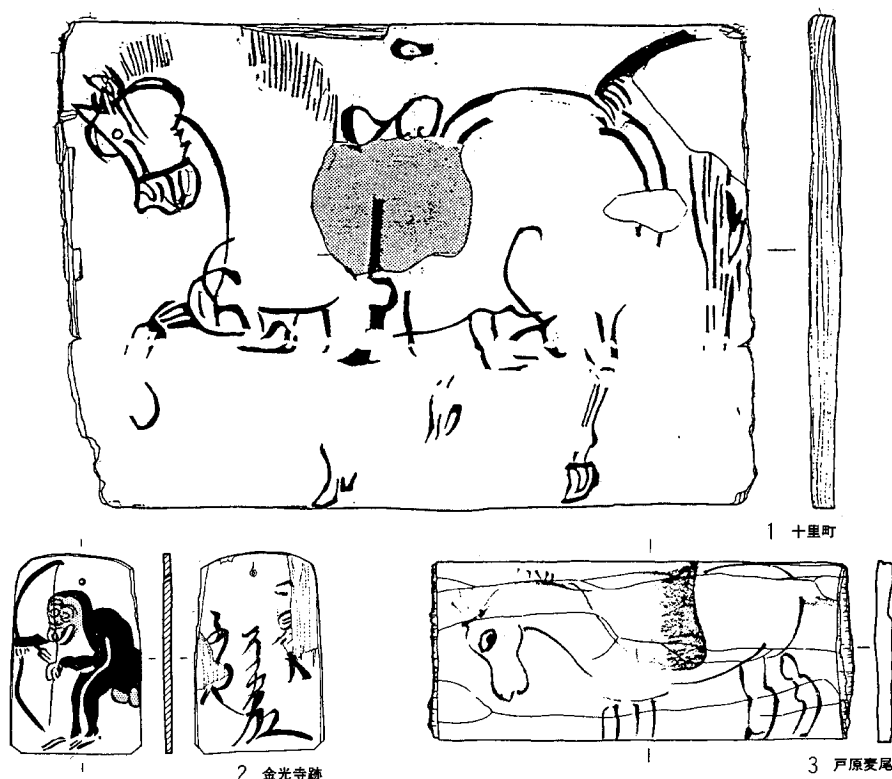


Fig. 2 出土絵馬実測図② (2/5)

計4点の絵馬が確認されている。個々の詳細は不明であるが、1点は「直径九センチの半円形で半分欠けているが、墨で両耳を立てた馬の姿がはっきりと描かれている^(注10)」もので、残り3点はいずれも長形状のものと思われる^(注11)。

河川は幅約10m、深さ約2mを計り、奈良時代の初頭に掘削され、平安時代の前半には廃絶されたと見られる。土馬260以上、ミニチュアカマド160以上、人面墨書土器約70、斎串約100 その他多くのものが出土している。

大宰府左郭8条9坊推定地^(注12)

13世紀の初めから14世紀前半にかけてのものと思われる溝から2点出土している。①は下半部が欠損するものの、馬の臀部らしきものが描かれている。上辺はゆるい山形に加工され、中央に円孔を有する。②は左半分程が欠損しており、鹿と兎らしきものが描かれている。残存する右端部は杓子状に加工されている。

推定金光寺跡 (Fig.2-2)^(注13)

寺院関係と思われる建物址付近から出土している。縦長の板に、弓を弾く左向きの猿を描く。面部と尻部に朱を施し、裏面には墨書が見られる。板は上方を幅狭とし、ゆるい山形に成形し、

中央に円孔を有する。

戸原麦尾遺跡 (Fig.2-3)

鞍をつけ、たてがみを編んだ左向きの馬を描く。上・下・右端部は欠損しているものと思われる。スギ材。11世紀後半代。

以上、簡単に出土絵馬の特徴を見てきた。少数ではあるが出土地は東北地方から九州地方にわたって分散しており、大宰府・推定金光寺跡例を除きいずれも奈良時代～平安時代に属するものである。ここでこの時期の出土絵馬の特徴をまとめておこう。

1. 形状は長方形を基本とし、法量は横10cm内外～15cm、縦6cm内外～10cmが標準である。これに対し十里町・平城京例はほぼ同規模で、縦横ともに通常の約2倍を計り、別格のものとして存在する。
2. 描かれた馬は左向き、右向きのものがあり、平城京例以外全て左向きである。
3. 飾り馬、裸馬があり、多くは飾り馬である。またすでに馬以外のものが描かれている。
4. 墨書を基本とし、彩色を施したものもある。
5. 曲物、木簡からの転用材がある。また多くは懸垂用の円孔を有する。

これらに加えて、頭部がやや下向き気味で、いずれかの足を上げ濶歩しているような姿勢が多いのは、筆致の差を越えて構図的な共通性を感じさせるものである。

次に出土遺跡について簡単に見ておきたい。奈良時代～平安時代の絵馬は、対蝦夷城柵、宮都、郡衛など多くが公的性格を有する遺跡から出土している。出土遺構は溝、水路、河川などの流路遺構が多く、他の遺物と混在し、廃棄された状態を示している。その中には、斎串、人形などの木製品を中心とするいわゆる律令期祭祀を特色づけるものが多い。いくつかの遺跡では馬形木製品、土馬、馬骨など他の馬に関わる遺物もあり、絵馬がそれらと共存していたことがうかがえる。このような中で十里町・戸原麦尾例は、前者が土壌内出土、後者が単独出土といった点で異った視点を要する特殊な例と言えるだろう。なお大宰府・推定金光寺跡例は、年代的にも形態的にもこれらと一線を画するものであり、次節にて検討することにした。

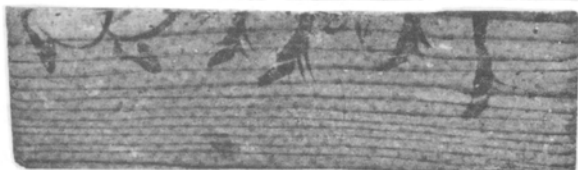
3. 初期絵馬資料の様相

一般に絵馬は室町時代中期頃を転換期とし、これ以降形状や仕様が多様化し、大型のものも作られ、また馬以外のものも多く描かれるようになるとされている。ここではそれ以前のものを初期の絵馬資料と仮称し、奈良時代～平安時代の出土絵馬に続く絵馬資料を検討してみたい。具体的には少数の伝世絵馬と各種の絵巻物に限られ、それに先述の大宰府・推定金光寺跡からの出土絵馬が加わることになる。

初期の伝世絵馬には奈良県奈良市秋篠寺、同北葛城郡当麻寺にそれぞれ伝わるものがある。^(注14) 秋篠寺の絵馬は昭和39年の本堂修理の際、天井裏から5個体が発見された(Fig.3)。1は上半分のみであるが、躍動する右向きの黒馬が描かれている。上辺はゆるい山形に作られ2ヶ所に円孔を有す



1



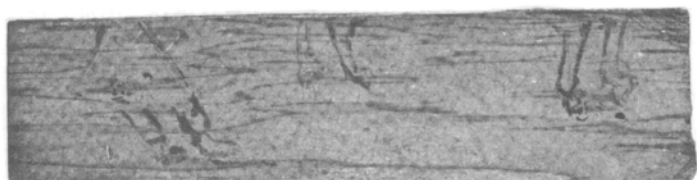
2



3



4



5

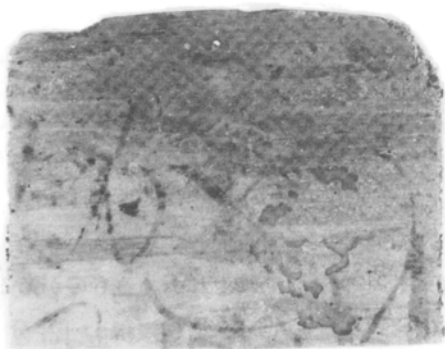
Fig. 3 秋篠寺本堂発見絵馬



1



3



2



4



5

Fig. 4 当麻寺曼荼羅堂発見絵馬

る。裏面に「奉施」の文字と「応永」(1394～1427年)の年紀銘が墨書されており、年紀銘をもつ最古の絵馬とされている。長さ14.6cm、幅6.1cm。2は中央部を欠損するもので、左向きの馬とその左側に人物を描いており、馭者による索馬の図のようである。上辺はゆるい山形とし、2ヶ所に円孔を有する。裏面には「秋篠□、薬師□、礼馬、右心□令満足」などの文字と「長録」(1457～1459年)の年紀銘が見られ、薬師如来に対する何らかの祈願と御礼がこめられているものと思われる。長さ14.6cm、幅8.6cm。これ以外の3点はいずれも小片で左向きの馬や人物が描かれており、後述の当麻寺における伝世絵馬に近い筆致をもつものもある。

当麻寺の絵馬は昭和35年の曼荼羅堂解体修理の際、その天井裏から各種の庶民信仰資料とともに5点発見されている(Fig.4)。いずれも長さ7～8cm、幅6cm弱を測り、ごく単純な略画で戯画風に描かれている。全て左向きと思われ、横に人物の顔を描くものもある。上辺が残るものはいずれもゆるい山形に作られ、中央に円孔を有する。年紀銘はみられないが、仕様や図柄あるいは他の庶民信仰資料との関係から鎌倉時代末～室町時代前期を下らないものと見られている。

次に限られた実物資料を補うものとして、平安時代末～室町時代初期にかけての絵巻物を見ておきたい(Tab.3)。具体的に絵馬が散見されるのは『年中行事絵巻』^(注15)、『天狗草紙絵巻』^(注16)、『一遍聖絵』^(注17)、『春日権現験記絵巻』^(注18)、『不動利益縁起巻物』^(注19)、『慕帰絵詞』^(注20)などであり、他にも『絵師草紙』^(注21)のように、絵師の子供が紙に筆で馬の絵を描いている光景が見られるようなものもある。これらの絵巻物は成立年代、背景、意図、内容など様々なものがあり、個別の検討を必要としようが、各々の場面にはある程度客観的事実が反映されていると考えられ、当時の絵馬をめぐる状況を読みとることは可能であろう。

このような資料をもとに平安時代末から室町時代初期における絵馬についてまとめてみたい。



Fig. 5
『天狗草紙絵巻』東寺の巻第一段(部分)

まず絵馬自体の特徴について伝世絵馬を中心にまとめると次のようになる。

1. 形態は長形状で上辺をゆるい山形に作るものが多く、1～2ヶ所の円孔を有する。
2. 馬は左向きで、人物を伴うものが多い。
3. 墨書を基本とし、朱を伴うものもある。また略画風のものも多い。

このような特徴は概して絵巻物に見られる絵馬にも共通するものである。筆致については秋篠寺の「黒馬」の写実性、あるいは他の多くに見られる略画風の自由さ、ともに奈良時代～平安時代の出土絵馬と異なるものである。大宰府・推定金光寺跡の出土絵馬3点については、大宰府①は上辺をゆるい山形に作り、この時期の典型的な形態と言える。他の2点

は類例が見られず、絵馬の多様化の萌芽とも考えられるがここでは類似資料としてとらえておきたい。

次に絵馬を取りまく状況について、絵巻物から看取される点を中心にまとめてみよう。

1. 神社のみならず、寺院にも奉納されている。また地方の小祠にも見られる。
2. 社の扉、壁、柱だけでなく、神木と考えられる樹木、あるいは特別に設けられた祭壇にも掛けられている。
3. 2枚1組とするものが多く、また彩色されていることを示すものもある。
4. 共同の祭り、あるいは個人的な祈願など様々な場面で見られる。

1については秋篠寺や当麻寺などに絵馬が伝世している事実もあり、加えて『天狗草紙』に描かれたいわば「絵馬堂」とも呼べるものの存在は、絵馬と寺院との強い結びつきを示すものである。また絵馬の地方への波及は、すでに奈良時代～平安時代の出土絵馬の分布が示すとおりである。3については必ずしも左向きの絵馬、右向きの絵馬をもって1組とするとは限らないようであり注意される。また4からは絵馬奉納の主体者ならびに目的の多様化がうかがえよう。

4. 絵馬の起源と変遷

各資料をもとに奈良時代から室町時代初期にかけての絵馬のあり方を検討してきた。出土絵馬と伝世絵馬ならびに絵巻物は時代的にも、また資料の性格としても異なるものであり、これらを同列に論じるには問題を残すところである。しかし「板状のものに馬などを描いて懸垂することにより何らかの祭り、祈願に用いる」ことを絵馬の本義であるとするならば、奈良時代の絵馬は

絵巻物	成立	場所	場面	絵馬の場所	特徴
『年中行事絵巻』第十一巻第三段	12C後半	今宮社(京都)	森林に囲まれた境内、三社の神殿の前。巫女、神人、里人による祭礼(疫神の鎮魂)の場。	三社の神殿の各正面、左右の扉や柱付近。鏡とともに2枚1組とする。	馬のみ、索馬図、馬以外のもの？ 長方形で上面はゆるい山形。
『天狗』東寺巻』東寺の巻第一段	13C末	東寺(京都)	中門東側の廻廊の南側に設けられた小堂。堂内に一人の女性、軒端近くに二人の人物を描く。	小堂の内壁や軒先に8～9枚掛ける。	左右に馭者を描く索馬図。 長方形で上面はゆるい山形。
『一遍聖絵』第四巻第四段	14C初め	因幡堂(京都)	堂の南面の様子。夜間の人々の様子を描く。	堂付近の築地壁の扉に2枚1組を掛ける。	不明瞭、索馬図？ 長方形。
『一遍聖絵』第五巻第三段	〃	白河の関(陸奥)	陸奥国に入った一遍が、関の明神を前に、道中安全(?)を祈願してぬかずく。	小さな祠の正面に1枚	索馬図。 長方形。
『春日権現験記絵巻』第八巻第五段	14C初め	熱田の宮(尾張)	興福寺の住僧老和僧都が参詣する宮の神前の様子。	社殿の柱や戸に2枚1組とする。	馬のみ、索馬図。 長方形で上面はゆるい山形。
『不動利益縁起絵巻』第二段			僧智興の重病回復を願い、庭先に設けられた祭壇の前で祈禱の祭文を読む	御幣や供物を並べた祭壇の正面に、文字を書いた紙とともに3枚。	索馬図。 長方形の紙絵馬。
『慕帰絵詞』第七巻第一段	14C半ば	玉津島明神(紀伊)	玉津島明神に参詣した西本願寺覚如上人らが境内の神木の前でぬかずく。	神木の幹や枝に2枚1組で10枚以上か。	馬のみ、索馬図。白毛と黒毛に描き分けるものあり。長方形で上面はゆるい山形。

Tab.3 絵巻物に描かれた絵馬

後世のいわゆる絵馬の祖型であることは疑えないところであり、時代とともにその内容の拡大あるいは変質がなされていったと見るのが妥当であろう。ここでは絵馬の起源と変遷にかかわるいくつかの問題を提起しておきたい。

古来より馬は生産、交通、軍事に重要な役割りを果たしており、人々の生活と密着した存在であったことは幾多の考古資料の存在からも明らかである。その背後に横たわる馬に関わる信仰の問題についてはこれまで文献や土馬を中心とする考古資料をもとに検討されてきた。今回その具体的な内容に立ち入ることはできなかったが、筆者は奥野義雄氏による「馬信仰は水神と漢神の両極の内容を内在させることによって一方では降雨、止雨の祈雨をもとにした水神信仰として、他方では行疫神を主体にした漢神信仰として現れていた^(注22)」という立場をとるものである。絵馬というのはそうした馬に関わる信仰が実際の馬に代わるものとして表出されたもののひとつであると言える。現時点で最も古い絵馬は8世紀前半のものであり、馬形木製品や土馬にやや後出するものの、出土遺跡や出土状況を見る限り律令期の祭祀の中で起源し、その拡がりとともに各地へ普及していったと思われる。ここで問題になるのはこれら馬に関わる他のもの同志の差別化であろう。まだ資料数に乏しく、実際の使用状況も含めて不明な点は多いが、福岡県沖ノ島には滑石製の馬形という特殊な存在もあり、今後種類ごとの特質やそれを越えたところにある表現方法の共通性などを検討してゆく必要があるだろう。例えば出土絵馬には左向きに馬を描くものが多いが、沖ノ島の馬形が全て左向きである点、また各遺物を通じて飾り馬と裸馬が存在する点などがあげられる^(注23)。

絵巻物によると、絵馬は鎌倉時代にはすでに多様化してきており、室町時代中期以降への基盤が整っていたように思われるが、その変化の兆しは平安時代の中頃、すなわち律令期の祭祀が衰退してゆく10世紀頃に求められよう。この時期の資料は乏しく具体的な様相は把握できないが、伊場遺跡のように馬形木製品が消滅した後も絵馬は存続していたと見られる状況もあり、恐らく馬形や土馬を含む律令期の祭祀遺物が衰退する時期に、絵馬がその枠からはなれて独自の発展を遂げていったと思われる。したがって絵馬の変遷における第1の画期と呼べるのは平安時代の中頃であり、その後鎌倉時代を通じて神社、特に寺院との結びつきを強めながら受け継がれてゆき、国家的な祭祀から個人的な祈願の場へと移行する過渡期を形成していったと思われる。

5. おわりに

最後に戸原麦尾遺跡出土の絵馬について少し触れておこう。本例からは時期的にも、また出土状況からも平安時代後期の過渡期における絵馬の一面がうかがえる。

戸原麦尾遺跡は中世を主体としており、絵馬の時期にあたる古代末期の状況は不明な部分が多い。しかし西側に接する多々良込田遺跡は官衛の性格の強い遺跡であり、本遺跡とその周辺も官衛域に含まれる地域であったと考えられる。またこの両遺跡の調査によって、多々良川は古来より氾濫と蛇行をくり返しており、安定するのは10世紀後半～11世紀以降であろうことが確認さ

れている。^(注27) 絵馬が出土した東西に走る溝は、多々良川流域における復元条里^(注28)に位置、方向ともに一致しており、絵馬は多々良川の流れと同様東から西へ向って流れ着いた状態で出土している。

このような背景の中で出土絵馬を位置づけるなら、それは官衙域における公的な祭祀の中で用いられたもので、他に祭祀関係遺物が出土していない点を重視するなら、すでに絵馬が単独で機能していたことが考えられる。本例は懸垂円孔の有無が確認できず、実際の使用状況も不明であるが、おそらく絵馬を主体とする何らかの祭祀の後に廃棄されたと思われる。その内容については推測の域を出ないが、先述の自然環境という観点からひとつの可能性としてそこに「氾濫する水流」に対する「鎮魂」の場を想定しておきたい。

以上古代の絵馬について、いくつかの問題点を提起したにとどまるが、戸原麦尾遺跡出土の絵馬は過渡期における絵馬の数少ない資料であり、また一方では地方における律令期祭祀の存続という問題についても一視点を与えるものであると言える。

(注)

- (1) 遺跡から出土する「馬などを描いた板絵」は、後世のいわゆる絵馬に発展してゆくもの、との解釈からすでに「絵馬」と総称されていることが多い。小稿もそれに従うが必要に応じ、遺跡から出土した絵馬を「出土絵馬」、伝世されてきた絵馬を「伝世絵馬」と呼び分けることにする。
- (2) 秋田県教育委員会 弘田棚跡調査事務所「弘田棚跡第46～52次発掘調査概要」 1983
- (3) 川西町教育委員会「道伝遺跡」 1984
- (4) 浜松市教育委員会「伊場遺跡 遺物編 I」 1978
- (5) 藤枝市教育委員会「郡遺跡発掘調査概報 III」 1986
- (6) 越前県文化財保護協会「『滋賀文化財だより』No.108 1986)
- (7) 朝日新聞社「『アサヒグラフ』 通巻3522号 1989)
- (8) 奈良県立橿原考古学研究所「奈良県遺跡調査概報 1976年度」 1977
- (9) 奈良県立橿原考古学研究所「奈良県遺跡調査概報 1980年度 第二分冊」 1982
- (10) 岩井宏美「絵馬点描」 岩井宏美編「絵馬秘史」 日本放送出版協会 1979 21頁
- (11) 奥野義雄「祈願絵馬寸論—発生期の絵馬にみる二つの信仰形態によせて—」(『奈良県民族博物館研究紀要』 第6号 1982 47頁)
- (12) 九州歴史資料館「大宰府史跡 昭和49年度発掘調査概報」 1975
- (13) 九州歴史資料館「大宰府史跡 昭和53年度発掘調査概報」 1979
- (14) 根岸競馬記念公苑学芸部「馬の美術名品展」 1983
- (15) 福山敏男編「新修日本絵巻物全集 第24巻」 角川書店 1978
- (16) 梅津次郎編「新修日本絵巻物全集 第27巻」 角川書店 1978
- (17) 望月信成編「新修日本絵巻物全集 第11巻」 角川書店 1975
- (18) 野間清之編「新修日本絵巻物全集 第16巻」 角川書店 1978
- (19) 高崎富士彦 源豊宗編「新修日本絵巻物全集 第30巻」 角川書店 1980
- (20) 洪澤敬三編「新版絵巻物による日本常民生活絵引 第五巻」 平凡社 1984
- (21) 梅津次郎 岡見正雄編「新修日本絵巻物全集 第18巻」 角川書店 1979
- (22) 奥野義雄 注10論文 48頁
- (23) 宗像神社復興期成会「宗像沖ノ島 本文」 1979 420頁
- (24) 金子裕之編「律令期祭祀遺物集成」 1988 200～204頁
- (25) 福岡市教育委員会「多々良込田遺跡II」 1980
- (26) 福岡市教育委員会「多々良込田遺跡III」 1985
- (27) 福岡市教育委員会「戸原麦尾田遺跡(1)」 1988
- (28) 日野尚志「筑前那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」(『佐賀大学教育学部研究論集』 24 (1) 1976)。

小稿は特に岩井宏美氏の著作・論文に負うところが大きかったことを付記しておく。また192頁の写真図版は根岸競馬記念公苑学芸部、秋篠寺、当麻寺関係各位の御厚意により転載させて頂きました。末尾ながら感謝の意を表します。